

【基調講演】

「やろみゃあ！チーム医療評価」
パネルディスカッション開催にあたり

名古屋第二赤十字病院 院長

佐藤 公治（チーム医療の推進に関する検討部会長／医療の質向上委員会副委員長）

最高の医療を行うためには、最高のチームが必要である。昨今、チーム医療や多職種連携と言われているが、なぜ簡単にできないのか。いざチームを作り、運用すると兼務で忙しい、頼られる人に業務が集中、時間外増加、事務局はどこ・誰、立ち上げたが継続できないなど課題が多い。加算が取れるから作ろうでは続かない。誰も良い治療がしたい。しかしボランティアでは限界がある。システム作りが重要である。継続して行くには活動評価が必要である。また管理としてのチームの評価も必要である。

昨年に続き今回の企画は、ガイドラインを読んだだけでは分からないチームビルディングそして継続のヒント、人・物・費用・管理の課題解決に繋がる糸口を見つけるための評価方法にフォーカスをあて、実践報告を通じ、ディスカッションを深め、日赤のスケールメリットを活かしたチーム医療実践・工夫を共有したい。

【事務局報告②】

チーム医療の評価方法について

医療事業推進本部 看護部 看護管理課 看護管理係長
橋爪 朋子（チーム医療の推進に関する検討部会 事務局）

評価とはなんらかの事物の値打ちを確かめること、あるいは価値を定めることである（ロッシ、2005）。チーム医療の評価は、チームの有用性、効果、そして課題を検討し、改善につなげるために行う。

客観的・定量的なアウトカム評価が望ましいが、評価困難な内容もあることからプロセス評価やストラクチャー評価も併用する必要がある。また、個別のチーム医療の評価については、実施するチーム医療の内容によって評価すべき内容が異なること、チーム医療の取組以外の要素も評価項目に影響することから、一律に評価項目を設定することは困難である。

医療の現場は常に変化し続けており、定期的に評価する機会を設け、課題を見出して改善策を検討し、次の実践につなげるというPDCAサイクルの展開を継続することが重要である。セッションでは、社会科学的な視点からの評価方法も紹介する。

【事務局報告①】

平成30年度チーム医療の推進に関する定例調査結果報告

医療事業推進本部 病院支援部 医療課 医療係長

中野 正樹（チーム医療の推進に関する検討部会 事務局）

【目的】日本赤十字社では、多職種が連携・協働し質の高い安全・安心な医療サービスを提供できるよう、平成25年3月31日付にて「日本赤十字社チーム医療の推進に関するガイドライン（以下、ガイドライン）」を全国の医療施設に配布し、その活用とチーム医療の取り組み・推進をお願いしてきた。今般、チーム医療の推進に関する各施設の進捗状況を把握し、全国より挙げられる課題を整理し、チーム医療の推進に関する検討部会において赤十字病院グループの今後の取り組み、更なる医療の質の向上に向けて検討を進めることを目的に日本赤十字社医療施設92施設に対し調査を実施したので報告する。

【概要】回答対象者は、「チーム医療の推進を支援・マネジメントする委員会・会議（以下、マネジメント委員会・会議）」が設置されている施設については、その事務局ないし内容を把握する部署の職員とした。調査内容は、ガイドラインの活用状況をはじめ、マネジメント委員会・会議の設置状況及び組織横断的なチームの配置と参画する職種や先進的な取組事例など、選択及び記述合わせ14項目について調査した。

【結果・考察】回答施設は92/92施設であった。ガイドラインの利用率は39.1%。マネジメント委員会・会議を設置する施設は25.0%とガイドラインの浸透と定着を含め、期待には届かない結果となった。しかしながら、チーム医療の推進に対し消極的な姿勢を回答する施設はなく、その必要性和重要性は十分に認識されていることから、昨今の医療情勢及び医療の質の評価踏まえ、マネジメント体制の構築が、より効率的かつ先進的なチーム医療の推進に繋がるものと考えられた。本調査結果については、平成31年度に発刊を予定するガイドライン第二版に反映させ、更なる赤十字病院グループの医療の質の向上に繋げたいと考える。

【実践報告①】

病院運営におけるチーム医療の位置づけとKPIを用いた可視化について

姫路赤十字病院 事務副部長

木下 信和

平成30年度診療報酬改訂でも明らかなように、現在の病院運営において「チーム医療の推進」こそ最優先課題として取り組むべきものであるが、姫路赤十字病院の取組について以下のとおり事例報告する。

当院では、病院運営の基本方針を定める「事業計画」において、「チーム医療」と「地域医療連携」を最重要課題として位置付け、最優先で取り組んでいる。これは、二つの連携が事業目標である「職員一人一人が心から働きたいと思える病院、受診したいと思える病院づくり」を達成するために不可欠な「安全で良質な医療の提供」に直結（或いは帰結）する課題であると認識しているからである。また、当院は、現在、入院・外来とも量的飽和状態にあることから、「量から質への転換」をキャッチコピーに、改めて「医療の質の向上」に注力している。そして「医療の質の向上」に最も効果的な「チーム医療の推進」は、直接的・間接的に「診療単価の向上」に繋がるものであるという考え方から、これを数値的に管理するためのツールとして「KPI (key performance indicator)」を用いている。

当院の取組より、KPIを用いてチーム医療の活動実績を可視化し、最優先課題として職員と情報共有することは、活動自体の活性化とそれに伴う収益アップ、更には職員の経営参画意識の醸成にも効果的であると考察される。